

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 117 回 自分の最期は自分で演出したい！

自分の最期は自分で演出したい...そんな気になったのは、つい最近のことだ。

人類が最高の生き物であるとしたのは、何時から、誰が、どうやって、そうなったのだろうか？ 生物学か考古学か、もしくは医学系の化学か、専門科学は皆目、見当もつかない。でも、それ故に人類は、他の動物にない、あるいは出来ないことを、随分たくさん持っているし、しようとしている。

こんなこと、考えること自体不謹慎であるし、当然、書いてはいけないタブーかもしれないが、例えば、「福祉」「介護」の話である。

人類というか人間以外に、この手の話はないはずだ。あまり心地よい言葉ではないが、正に「弱肉強食」、それが「自然の摂理」として、そのままの世界で生きている。弱者や老いたる者は、なんら躊躇なく「死」と向き合っている。とてつもない知恵と能力を身につけた「最高の生き物」である人間だけが持っている、誇るべき概念である...と最近考えるようになった。

今、我国では「福祉」「介護」は、大きな社会問題になっている。確実に少子高齢化が予測される将来、その財源確保の困難性、当事者やそれを支える周辺者の「心」や「肉体」の負荷の問題、宗教倫理や国民性の概念の相違、医学上の諸説等々、複雑かつ難しい問題を露呈している。それでも究極的解決策を見出して、必死に対処しようとしている姿は、やはり「最高の生き物」である人間たる使命かもしれない。

勝手に我儘^{わがまま}を許してもらえば、こと、小生自身にのみ限り、自分の最期は自分で演出したいと思っている。

自分の意思さえ自覚できず、人間の尊厳すらなくなって生きている「自分自身の姿」を想像するに、とても、耐えられそうにない。「先義後利」を座右の銘として生きてきて、「義」を尽くせなくなった己自身が、無性に哀れで、やっぱりプライドが許せない。もちろん限度はあるとして、私自身に限って言えば、「福祉」も「介護」も欲しくはない...こんな気持ちになっている。

将来のことは、誰も分からない。神様も DNA も、益してはいかがわしい占い師なんぞに分かるわけがない。

「まだ、現実味のない今だから、そんな甘い事言って」...そんなお叱りが聞こえてきそうである。「福祉」「介護」は無用だからやめろ！なんて話ではない。金持ちだけが享受する権利があるといった問題でもない。でも、ひょっとしたら、小生と同様に考え始めている人、いるかもしれない。実はこの問題、新しそうで昔からある、タブーで、難しいテーマである。きっと、永遠に回答を得ることができないテーマなのかもしれない。